

服部英雄のホームページ

稲垣敏子さんと泰彦先生

20120414

敏子さんがとつぜん亡くなられて数年が経過した。

わたしはその1年ほど前に百合ヶ丘の御自宅を訪問し、2、3時間お話しを聞いてメモを残している（20060709）。メモに登場する人物もほとんど亡くなられてしまった。わたしが誇る先生たちは、戦後の激動のなかに理想を求めて青年期を過ごしたすぐれた中世史家である。わたしは「時代と学問」に強い関心がある。いつかは史料を集めて整理したいと考えているが、はたしてその実現を時間が許容するかどうか心許ない。

わたしだからと心を許して話して下さった内容を本人のお許しを得ることなく、こういう公開のしかたをしてよいのかわからないけれど、甘えさせてもらいたい。「だめよ、もう。ほんとうにしかたがない人ね」、そういつて最後は許して下さることにしよう。泰彦先生の研究歴に空白があることは偲ぶ会で敏子さん自身がみなに語ったことでもある。わたしの大好きだった人たちの真摯な生き方を記録しておきたい。

あんなに何百人もくる立派な葬式の喪主にさせられた。あなた（泰彦先生）、ほんとにひどい、と泣いた。

青山の小学校（青南小学校）、永原さんと同じ。学年も違うし、男と女は別々だから、当時は知らなかった。あとから同じ小学校だといわれた。山田渉さんのおかあさんも同じ学校。—わたしは佐藤和彦さんが倒れられた小山靖憲さん追悼シンポジウムには出ていました。みなびっくりしたらしいわね。松本新八郎さんを偲ぶ会に出たら、大田順三さんと福田栄次郎さんと、佐藤和彦さんがいて、そのときが佐藤さんにあった最後。松本さんは専修ではお幸せだったらしいですね。なにかしゃべるようにいわれた。断ったつもりだったが指名された。お子さんもおられるし、あまりいえないこともあるが、とぼかしながらしゃべったつもり。専修大学では幸せだったらしい。あのひとだから女子学生には人気があった。ご存じかどうか知らないけれど、人にいえない話、大びらにできない話もあるんですよ。今の人は何も知らずにいろいろと書いている。

悪い時代であった。うちのも「松本さんとはけんかしたんだ、もう口をきかない」とかいていたけど、史料の所長になった最初の展覧会に来られて写真も撮ったりしてありますけどね。(稲垣さんと松本さんは)史料に入ったときは6編だったかで、もともと一緒だった。みんなあれやれこれやれで、松本さんにはひどい目に合わされている。網野さんは特にひどい目に合わされた。網野さんは常民にいた。

網野さんは声がよい。話す声もよいが、歌もうまい。歴研大会ではわたしもいっしょに「大和は国のまほろば」とか歌った。

—稲垣先生が平林寺でおにぎり(またはせんべえ)を食べている敏子さんの横顔がかわいかったといったことになっています。

(史料編纂所の小旅行)ほんとうは海に行こうとかいっていたが、平林寺にハイキング。稲垣は蛇をポケットに入れていた。驚かそうというつもりだったらしい。わたしは蛾のように鱗粉のあるものは嫌いだけれど、へびは平気。「ちょっとさわらせて」といったのでおどろいたらしい。それで「へびひめさま」とかいわれて、ちょっと史料では話題になった。安田夫人なんか、キャーキャーいっていたけれど。

ビールなんて高くて飲めなかった。焼酎、それも変な戦後の質の悪いもので悪酔いする。わたしは親も飲まず、周りに酔っぱらいがおらず、酔っぱらいを知らなかった。結婚しようと思っている人(理想の人)が、騒いでいたので悲しくなって涙が出た。永原さんが、青木敏子は線が細いぞといった。

史料に入ったのは昭和22年、結婚は24年。どこの家もオムツを干すからあの家は生まれたなっってすぐにわかった。

食べるのがやっつ。史料の給料は男と女、官立か私立かでちがっていた。女も女高師が一番高く、日本女子大は低いという具合だった。わたしの辞令は「東京大学雇を命ず」だった。川崎(庸之)先生の文化芸能研究会の事務局を網野夫人と一緒にしていた。今から思えばずいぶん立派な先生方が来ていた。本も出した。いい本だと思う。永原さんの奥さんは女性史の会の方の事務だった。

遠山・井上論争というのは所感派、とかよりはあと。格調の高い論争だった。

わたしは史料では遠山さんの下にいた。

昭和29年ごろに出版が再開されるが、それまではやることがない。

幕末史料は近世史料の重要性を認知してもらうために、毎年1冊出していた。遠山さんも「校正ばかりで、これでは編纂もできない」といった。それで永原さんも遠山さんもやめた。稲垣は「おれは最後まで史料にいるよ」といった。夫婦同じところに勤めていると、職場の話はしない。だから史料が好きだったかどうかは聞いていない。

渡辺義通は少し上の人、三井令子さんが奥さん、どこか病院のエレベーターで、義通さんと会ったことがある。藤間生大、石母田、林基、みなその系列。ずいぶん危ないことをしているなどは知っていた。警察を気にしていた。阿佐ヶ谷に最初住んで、つぎに駒込に引っ越し、ここはどこの警察署からも遠いからいい、といていた。家で会議をするからどこかに行ってくれといわれて、母のところに行ったことがある。

全く勉強はできないようになっていたけれど、石母田さんがたすけてくれた。民科に入れてくれた。民科では歴史の解明が仕事。

弥永先生と稲垣は、なかがよかった。ちよちゃん（小川千代子さん）も小さいときから知っている（*長野県史などもいっしょ）

弥永先生のお宅の門番の小屋が（空襲でも）焼けなかった。弥永先生が名古屋に行くとき、だれに貸そうか。稲垣なら大丈夫。それで一年だけすんで営団の抽選が当たった。武蔵野市だけど目の前が練馬区、佐藤（進一）先生のおうちも近かった。

杉浦梅潭日記・函館奉行の本を出した。いつも（泰彦から）もっと書けといわれていたけれど、泰彦には見せられなかった。でも川崎先生が、稲垣君が生きていたらどんなに喜んだらうといってくれたので、うれしかった。

（函館奉行所の建物を復原するそうです。）

そう、できたら行ってみようかしら。

いつも鉄道、ジパングクラブに入っているから。（旅行は）ひとりよ。

（狩野久さんと、ちぐさのママさんが所長室に行ったそうです。）

ちぐさという名は聞いているわねえ。奈良に行くといつも太って帰ってきた。初め（結婚当初）はそんなに太ってはいなかった。日吉館のお婆さんはずいぶん泣いてくださった。あんべの方は新婦人だって、山口さんがいていた。ご主人が演劇、演劇をしている人は店を出したりする人が多い。

店をたたんでからどこかであったことがある。

（永原先生が海軍でカッターを漕いでも、ぼくはへとへと、稲垣君はいつも平気でここにこしていたといっていました）

体力はずいぶんあって三浦半島の山かなんか歩いていて、だれもついてこなかったといっていた。

（服部から）

稲垣敏子先生

過日はいろいろお世話になりました。

長く泰彦先生のようにじぶんもなりたい、大きな人物になりたいと思っておりませんが、

先生が活躍されていた頃の年になっても、なかなかマネもできず、近づけないなと思います。

ただ「人間が好きだ」という泰彦先生の生き方は、わたしもそれなりに継承しようとしているのだとは思いました。

杉浦梅潭日記（*目付日記、奉行日記）は文学部に1部架蔵されていましたが、もう一部図書館に入れるつもりです。

それからお話のあった歴研大会のこと、書いた文章がありましたので、参考までにお送りいたします。小熊英二「民主と愛国」という本で、いろいろなことが書いてありますが、文章を残した人のことしかとりあげられていないのはしかたがないことです。よくない時代だったというお話は、ある程度理解いたしました。

（敏子さんより）

関東もやっと梅雨があけたようです。

先日はわざわざおたづね下さり、またお手紙有難うございました。

「民主と愛国」はわたしも買って読みました。やはり自分が多少なりとも、経験したことでは間違いに気づきました。

p 3 2 4 の歴研大会最終日——「歴史家コーラス団」というのがわたしも参加したところですが、「歴史家コーラス団」などと銘うってやったものではありません。こういうのが「伝説」ができてくる一例だと思います。藤間さんは歌唱には参加しておられません。全くこういう書き方をされると歴史はどんどんあやまった方向に導かれるのだ、と。この本は全体的にはわたしも感心して読みましたが、やはり経験したことの無い人にはわからないかなと、思いました。

あの頃の話は皆がふれられるのを避けてしまい、それで月日がたってしまうと、伝説ができて、それが一人歩きしてしまうのですね。何だか思っていることがうまく表現できませんが、何十年も生きてきてしまうと、そしてそれが大へんな時代だったので、この平和な物のあふれた拝金主義の時代からは、想像するのも、なかなか大へんなことです。

泰彦のこと、いつまでも思い出して下さって、本当に嬉しく思っています。あの時代は結婚だって恋愛結婚するのは「はしたない」と思われていたし、そして同じ職場に夫婦でいて、子供も生まれて、働きながら育てるといのは相当大へんなことでした。そういう仲間がいたので、やってこられたのです（「働く母の会」という会に入っていました。去年50周年でその歴史を閉じました）。

今の女性は私たちとまたちがった困難があるとは思いますが――

おそまつなものですが、三年前に書いたもの、別便でお送りします。お体大切に　ご活躍

を祈ります。

稲垣敏子

服部英雄様

どうぞ私のこと、先生とおっしゃるのはおやめ下さいませ。お願いします。